

機関番号：34317

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820072

研究課題名（和文） 台湾大学蔵『日本書紀』古写本の総合的研究

研究課題名（英文） The overall research on 'Nihon-syoki' codex that National Taiwan University owns

研究代表者

是澤 範三 (KORESAWA NORIMITSU)

京都精華大学・人文学部・講師

研究者番号：20554075

研究成果の概要（和文）：日本統治時代、台湾に多くの日本古典籍が渡った。その中でも、国立台湾大学（旧台北帝国大学）には『日本書紀』の多くの貴重な写本がある。本研究では、国立台湾大学における『日本書紀』の収蔵状況について調査し、特に貴重な三本を選び出版する。第一弾として圓威本『日本書紀』が2012年に台湾大学図書館より出版される。

研究成果の概要（英文）：In the Japanese colonization, A lot of Japanese classics documents were exported to Taiwan. Especially, National Taiwan University has a lot valuable transcript of "Nihon syoki". I investigated the transcripts of "Nihon syoki" that belong to National Taiwan University I select especially valuable three transcripts of "Nihon syoki" and published them. As the first "圓威本日本書紀, Nihon syoki that Eni transcribed" will be published with National Taiwan University Library in 2012.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	610,000	183,000	793,000
2010年度	950,000	285,000	1,235,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,560,000	468,000	2,028,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：日本文学、日本語学、台湾大学、日本書紀、桃木文庫、桃木武平

1. 研究開始当初の背景

720（養老4）年に舎人親王らによって撰上された『日本書紀』（以下、「書紀」と略記）は、正当な国史としての位置づけにより、早くから「講筵（講書）」が催され、内容のみならず、その訓読にも重要な価値が置かれ、訓み継がれてきた。それは中世、卜部家により集成されるが、和語により訓みやらげようとする書紀の訓点は、漢籍や仏典のそれとは

違い、訓読史上、特殊な位置に置かれる。この点は、小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』（東京大学出版会、1967）、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（東京大学出版会、1980）らによってつとに指摘されてきたところである。書紀古訓の特徴は、和語がそのほとんどを占め、その訓みは片仮名だけでなく、古体を伝えると考えられる万葉仮名によるもの、さら

には朱・墨でアクセントを標示した声点も存する。このような書紀古訓の研究は、奈良・平安・鎌倉にかけて伝えられ増補される時代の重層性と、歴史学・国文学・国語学にまたがる問題をほらむ。こうした研究は、書紀古写本の影印資料に基づくところが大きく、古写本の渉獵が非常に重要な意味を持つ。

書紀古写本の主要なものは、1926～27年にかけて影印版として毎日新聞社より刊行され、斯界研究者への便宜が図られている。以降、翻刻、索引作成、研究等が進められ、近年では、石塚晴通らの手により尊経閣文庫本と宮内庁書陵部本が『尊経閣文庫本日本書紀本文・訓点総索引』（八木書店、2007）、『宮内庁書陵部本影印集成 第1期 日本書紀』（八木書店、2006）として相次いで刊行され、古写本の影印・翻刻・索引等の刊行が佳境に入った。それとともに書紀古写本を利用した総合的な本文批評（テキストクリティーク）研究の機が熟しつつある。つまり、従来、書紀古写本の系統研究が、本文の異同、異体字、和訓、訓点、漢字に施された声調、和訓に施された声点の問題、書き込み注記等、多用な要素をはらみながらも書誌的問題に終始していたのに対し、その多用な要素をリンクさせる、系統的・総合的書紀受容史研究の萌芽を見いだすに至っている。

そもそも書紀の古写本自体がそれぞれ国宝もしくは重要文化財級のものであり、原本の閲覧は容易ではない。その意味で、国内において、なお公刊が期待されるものとして、熱田本、宥日本、一峯本、向神社本等あるが、非公開ながらも研究者が個人的に調査した記録が存し、書紀を専門とする研究者にとっては必ずしも未知の資料ではない。

一方、こうした書紀研究の新たな局面を迎えるなか、以前より斯界研究者の間で注目される数本の写本が、今なお国立台湾大学（中華民国：台北市）で具体的な調査がなされぬまま眠っている。それらの写本は、日本の台湾統治時代に台北帝国大学（現国立台湾大学）が購入したものが、戦後置き去りにされたまま、長らく研究者から顧みられることのなかったものである。

書紀古写本を研究する環境が整いつつある中で、現存するものを取りこぼす形で行うのは九仞の功を一簣に虧く恐れがある。また一方で新しい資料の出現は、行き詰まる資料研究の限界に新たな道を開くことが期待される。ここに、その閲覧の不便さからあまり取り上げられてこなかった台湾大学図書館が所蔵する書紀古写本の実態を明らかにしておく必要がある。

2. 研究の目的

台湾大学図書館所蔵の『日本書紀』古写本

を調査し、重要なものについては今後の研究に資するものとして出版することを目指した。

また、台湾大学図書館の桃木文庫の概要、および旧蔵者である桃木武平に関しての調査もあわせて行い、その事績を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

今回の調査研究のために、圓威本（全63丁）をはじめとする書紀古写本3本の披見・記録・調査をもとに、翻字・翻刻を行い、研究成果として研究報告書を作成するとともに、台湾大学図書館と交渉し、調査の許可および出版の可能性を探りつつ、学術資料としての位置づけを明確にする。

4. 研究成果

(1) 圓威本出版

本研究は、旧臺北帝國大學（1928-1945、現國立臺灣大學 1945-）において蒐集された多数の古典籍のなかでも、多くの写本・刊本を有する日本の国史『日本書紀』の古写本に注目し、その中でも、膨大な数の万葉仮名訓を有し、『校本日本書紀』（中村啓信編）で対校本として使用された圓威本を中心に調査した。

当該資料の調査の許可をくださった臺灣大學圖書館は、既に重要な古典籍についてデジタル化を進め、保管室も最新の設備を整え、貴重書の保存に尽力されている。訪館した際に、臺大図書館の日本古典籍の主要文庫である「桃木文庫」が眠る保管室を案内していただいたが、芳香な桐の棚と、一定の温度で冷たく保たれた室内に、永遠の時間を刻んでいるようなのであった。研究計画書を提出し、圓威本の公刊を提案すると、快諾いただいたばかりか、そのほかの『日本書紀』の写本でよいものがあれば、セットで出版をする旨のご提案がかえってきた。計画書にも、桃木文庫のほかの二本について、調査を希望していたが、すべて臺大図書館が出版を請け負ってくださるということであった。ついでに、その翻刻・解説等の作業を小生に委託していただき、契約書を交わした次第である。書紀古写本3本の出版は漸次行われるが、まずは一番の目的であった圓威本が、2012年を予定として出版される。

(2) 圓威本解説

圓威本『日本書紀』は巻第二のみの室町時代の写本である。万葉仮名による膨大な数の傍訓の記載があることで、つとに注目されていたものである。中村啓信氏による神代巻校訂作業の成果である『校本日本書紀』（全四冊、一九八九～一九九五年刊、角川書店）で対校本として使用され、本文の字体と傍訓

(片仮名訓・万葉仮名訓)については周知のことに属するが、その実態および省略されていたヲコト点や声点などの詳細は、今回の出版により視認することが可能になる。

まず、書誌を記す。

台湾大学図書館登録番号 ○四八一九

台北帝国大学図書館総登録番号 四五五

二〇(昭和四年三月三十一日登録)

桃木文庫番号 五一八

桃木武平自筆目録番号 五六三

外題 無

表紙 改装

内題 日本書記卷第二

尾題 日本書紀卷第二

装丁 袋綴

卷数・数量 一卷・六十三帖

寸法 縦二十七・八 横十八・三

一面行数・字詰 六行・十四字

奥書 嘉吉二年壬戌拾月廿五日申時書之
筆者圓威年/廿五 (注一)

蔵書印 「吉永蔵書」「桃木書院蔵」「臺北
帝國大學圖書館」※改装表紙綴じ
込みに判読不明の蔵書印あり

漢字本文の他に、傍訓(万葉仮名訓、二種
の片仮名訓—第一種は圓威筆、第二種は別
筆で第一種の後に書き入れられたもの)、
義注、ヲコト点、声点がある。

嘉吉二年は西暦一四四二年、つまり室町時
代の写本である。表紙と綴じ方については、
久保木秀夫氏の報告書から引用(原文横書
き)させていただく(注二)。

表紙は後補、薄柿色に渋引き刷毛目の模
様入り。また最終丁に続いて原ウシロ表
紙とおぼしきものあり。なお後補表紙と
本紙とは糸で綴じられているが、それと
は別に本紙・原ウシロ表紙には紙釘装
(太めの紙縫等を綴じ穴に通し、その両
端を潰し広げて料紙を綴じ合わせると
いう装訂方法)の痕跡が認められる。ち
なみに綴じ穴は5つである。

『日本書紀』(以下、書紀と略称)は、養
老四(七二〇)年に成立した日本の正史であ
り、記録には「日本紀」「日本書記」など
の記載もある。古代日本の律令国家が編纂
した六つの国史の最初であり、他に『続日
本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本
文徳天皇実録』『日本三代実録』と続く。
『続日本紀』卷第八の記録は左記のよう
に「日本紀」とあるが、書紀を指すと考
えられる。

先是、一品舍人親王奉勅、修日本紀、至
是功成奏上、紀卅卷、系圖一卷。

全三〇卷からなり、卷第一、二は日本の神
話を収載し「神代卷」と称す。書紀が編纂
された時代、まだ日本に平仮名・片仮名は
なく、

漢字を借用していた。本文は漢文(中国語
文)で書かれており、その点、同時代の『古
事記』

(和銅五(七一二)年成立)の文体(和製漢
文)とは異なる。近年、森博達氏が、一部
の巻の歌謡・訓注の万葉仮名表記および文
章とに関し、中国人表記・述作説を提唱し
、注目を集めた(注三)。森氏の説は、書
紀歌謡の万葉仮名の漢字音を根拠として展
開するもので、現代の書紀研究の画期をな
すものであった。

日本の神話は、『古事記』と『日本書紀』
残存する『風土記』およびその逸文が伝
える。十一の章段から成る書紀神代卷の
内容は次のとおりである。()内は「一書」
の数

卷第一

第一段 神代七代章 (六)

第二段 神代七代章 (二)

第三段 神代七代章 (一)

第四段 大八洲生成章 (十)

第五段 四神出生章 (十一)

第六段 瑞珠盟約章 (三)

第七段 宝鏡開始章 (三)

第八段 宝劍出現章 (六)

卷第二

第九段 天孫降臨章 (八)

第十段 海宮遊幸章 (四)

第十一段 神皇承運章 (四)

神代卷で特筆すべきことは、各章段が、正
当な記録としての「本書」のほかに、異伝
としての「一書」を複数併載している点
である。これは、中国の『三国志』裴松
之注の方式に類似する。また、一書は、
断簡として残存する最古の神代卷古写本
の書式から推測すると、小字二行書き
(小書双行)の分注であったと考えられ
る。そのような書式の写本として、鴨脚
本、一峯本、玉屋本、三嶋本などがある
。現在、出版されている書紀のテキスト
は、「本書」に対し、「一書」を一字下げ
て記載している。この書式は卜部氏の
人物(一説には兼延)が改変したもので
あり、中世に書紀研究を集大成し、卜部
氏の重要な証本を作成した卜部兼方の
校訂本(弘安本、一二八六年写)の頭注
に「□家本一書為注。而為易見私如此
書之」とある。このように、鎌倉時代
以降の卜部系の書式をもつ写本を卜部系
、古態を伝える写本を古本系(非卜部系)
として仮に区別している。圓威本は、一
書を小書双行にせず、一字下げせず、
さらに冒頭の改行もせず、本書に連続
させている。圓威本における改行は、歌
謡の冒頭の場合のみ行われるが、それ
もすべての歌謡に行われているわけは
ない。圓威本は、書式が卜部系とは異
なる点、また、本文が一峯本と類似す
る点をもっていることから古本系(非
卜部系)に属するといつてよかろう。一
方、ヲコト点は、訓注の「A此云B」
が「A此をばBと云フ」と

ト部系の訓みを示す。したがって、本文部と訓点は分けて考えていく必要がある。

書紀の原文 (original) は、もとより漢文のみで記されたものであったが、成立後間もなくから平安時代にかけて、日本紀講書 (日本紀講筵とも) と呼ばれる解説作業が行われている。現存の写本に大量に確認できる和訓や声点の中には、そのときのものを伝えるか、その影響をうけたものを含んでいると考えられている。例えば、書紀傍訓の万葉仮名訓といえば、乾元本 (ト部兼夏、一三〇三年写) が有名である。乾元本に記載の万葉仮名傍訓は、いわゆる「上代特殊仮名遣い」の異例がほとんどなく、書紀成立後に催された講書でのいわゆる「古訓」を伝えるものとして注目されている。

古代の書紀研究は、中世に成立した『釈日本紀』により集大成される。いわゆる「日本書紀私記」によって、本文と傍訓は解体して整理された。つまり、書紀の古訓は、日本紀講書の成果の積み重ねとして、その価値が評価される。一方、圓威本の万葉仮名傍訓の位置づけについては、山口真輝氏の研究により明かとなった。山口氏は、圓威本の万葉仮名傍訓と『御巫本日本書紀私記』の万葉仮名訓との類同性を指摘し、圓威本が、御巫本『日本書紀私記』との対校本として有効であると結論づけたのである (注四)。

『御巫本日本書紀私記』(以下、「御巫本 (みかなぎぼん)」と略称) は、圓威本から遡ること十四年の応永三十五 (一四二八) 年に髪長吉叟 (道祥・荒木田匡興の法名) が書写したものである。圓威本が、本文の傍注として訓を万葉仮名で記すのに対し、御巫本は、見出し語をあげて、その訓を万葉仮名で記す。両書の万葉仮名訓は、もともと片仮名で書かれていたと考えられるものを、再び中世的な万葉仮名で書くということがなされており、その過程で生じた誤写・誤記が散見される。そのような誤りが両所に共通して見られる一方、圓威本独自の和訓も見られるなど、今後、調査すべきことは多い。和訓に施された声点の調査・整理も俟たれるところであるが、書紀諸本の声点の調査から日本紀講書の研究を続けてこられた鈴木豊氏が、二〇一〇年、古代から鎌倉時代までの書紀受容史の概要をまとめられた (注五)。これら一連の研究をふまえることにより、室町時代の写本である圓威本は、鎌倉時代以降の書紀受容史を考えるにおいても重要な資料となり得るのであり、それはまさに、これから進められていくテーマなのである。

注一 「筆者圓威」について特定はできないが、候補として高野山真言宗光應山東光院普光寺開祖をあげることができる。普

光寺の聖観音菩薩像背銘によれば、一四五七年入寂とあり、奥書の年齢の記載とあわせれば、その生涯は一四一七年—一四五七年で、四〇歳で没したと推定できる。また、巻末に記載される「主有金」については、鳥文馨 (広島県福山市重要文化財) 銘文 (永享四 (一四三二) 年作) に「有金」の名があり、「新山寺常住也」「願主金資有金」「永享四壬子霜月日」の銘文がある。参考として記す。

注二 久保木秀夫 (二〇〇二) 『2002 年度 財団法人交流協会日台交流センター歴史研究者交流事業報告書 台湾における古筆資料の所在調査と研究』財団法人交流協会

注三 森博達 (一九九一) 『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店 (一九九九) 『日本書紀の謎を解く一述作者は誰か一』中公新書

注四 山口真輝 (一九九八) 『御巫本日本書紀私記』の和訓について—台湾大学蔵『圓威本日本書紀』万葉仮名傍訓との比較から— (『訓点語と訓点資料』特輯号)

注五 鈴木豊 (二〇一〇) 「日本紀講書とアクセント—『日本書紀』声点本の成立に関する考察—」『論集 VI』アクセント史資料研究会

(3) 桃木文庫と桃木武平

国立台湾大学図書館の日本古典籍は、桃木文庫、上田文庫、長澤文庫の主要三文庫からなる。文庫名の由来は、上田万年、長澤伴雄、桃木武平、いずれも旧所蔵者に由来する。『日本書紀』は特に桃木文庫に注目すべき諸本が多数あり、大正 8 (1919) 年と 9 年に京都と東京で開催された「日本書紀撰修千二百年紀年會」に、圓威本を含む写本 7 点が陳列されていたことを確認できる。

旧所蔵者の桃木武平については久松康二氏『『桃木文庫』と桃木武平』(1998 年稿、台湾大学図書館 HP および同館典藏日文解題図録に転載) に詳しいが、生没年等を補足して改めて紹介する。桃木武平 (ももきぶへい・1858—1929) は神戸の生まれ。造船業に関わり、海事史料の蒐集家・研究者としても知られ、神戸市会議員の経歴もある。国史学を好み、古今の書を蒐集、明治 35 (1902) 年に私設図書館「桃木書院図書館」を開設し、一般にも蔵書を開放するなど、関西における図書館運動の先駆者でもあった。桃木書院図書館は明治 43 (1910) 年に閉鎖。蔵書のうち、和洋字典類、叢書類、新刊書等は、明治四十四 (1911) 年開館の神戸市立図書館に寄附されたが、和漢の古典籍は台北帝国大学図書館の

所蔵に帰す。台北帝国大学図書館が購入した経緯は詳らかでないが、神戸の古書業白雲堂（古家実三）が昭和4（1929）年3月末に納入した。鳥居フミ子氏が紹介した総図書館の記録には、次のようにある。

桃木文庫 五四〇部 四、八七九冊
本邦古典ノ蒐集ニシテ古写本古版本多ク、殊ニ日本書紀の異本、異版ノ珍本多シ。桃木武平翁ノ旧蔵書ニシテ、曾テ京都帝国大学ニ委託保管シアリシモノ

2010年、大阪府立中之島図書館で、武平自筆（昭和2年10月執筆の序文あり）の『桃木書院蔵書目録 古典之部』の存在を確認した。これにより、台湾大学図書館に渡った桃木書院の古典籍と、現存する桃木文庫の古典籍との照合が可能となった。そこには548部・4,881冊とあることから、桃木書院の古典籍ほぼすべてが台北帝国大学図書館の所蔵に帰したことがわかる。目録の筆頭に配されるのは書紀で、「神代卷古写本」（6点）をあげ、特に書誌を記す。友人住田正一編纂『海事史料叢書』（全20巻、1929—1931年刊）に載る桃木武平の略伝（第20巻323頁、長子桃木長治氏執筆）は、次の文章で結ばれている。

豫テヨリノ希望ニヨリ、海事史料研究ヲ樂シミテ渡臺セシニ、間モナク臺北ニ於テ病臥シ、遂ニ臺北病院ニ於テ昭和四年四月二十九日七十二歳ヲ以テ永眠セリ。

上記の記述により、桃木武平の生没年とともに、台湾で死亡したことが判明した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

是澤範三、台湾大学図書館蔵圓威本『日本書紀』の声点とその資料的位置づけについて、訓点語学会、2011年5月22日、京都大学

〔その他〕

ホームページ

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/hanzo/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

是澤 範三 (KORESAWA NORIMITSU)
京都精華大学・人文学部・講師
研究者番号：20554075

(2) 研究協力者

毛利正守 (MORI MASAMORI)
皇學館大学・文学研究科・教授
研究者番号：70140415
蜂矢真郷 (HACHIYA MASATO)
中部大学・人文学部・教授
研究者番号：20156350
山口真輝 (YAMAGUCHI MAKI)
所属なし
研究者番号：なし